校長室の窓から ～夢の扉 第39号～愛媛編

Ｒ２．１．２０（月）

文責　学校長

修学旅行に行ってきました。

～初めての関西への修学旅行は天候に恵まれました～

１　スキー・USJ・大阪城・なんばグランド花月を楽しみました。

１月１４日（火）～１月１７日（金）の日程で、２年生が初めての関西への修学旅行に行ってきました。初日・２日目は**滋賀県の箱館山スキー場**でスキー研修に挑みました。全国のスキー場が暖冬の影響で積雪が見込めず、中には今シーズンの営業を断念するスキー場も相次ぐ中、箱館山スキー場は人工降雪機をフル稼働させて第２ゲレンデの１コースとキッズコースが滑走可能な状態でした。初日はキッズコースで歩行や転倒訓練から開始しました。２日目の午前中はなだらかなキッズコースでボーゲン滑走を繰り返し、少しずつ上達していきました。午後からは、雪も降り始め、**一面の銀世界**となりました。小雪の降る中、第２ゲレンデに移動してリフトに乗って滑走するまでに上達したグループもありました。３日目は、大阪に移動して終日**ユニバーサル・スタジオ・ジャパン**を楽しみました。フライング・ダイナソーに挑戦したり、ハリーポッターの世界を堪能したり、ゲームに挑戦してキャラクターグッズをゲットしたりとそれぞれにＵＳＪを満喫していました。最終日は、**大阪城**に上り天下人の心境を味わい、**なんばグランド花月**では、キングコング・ブラックマヨネーズ・オール阪神巨人・西川きよし・坂田としおなどによる漫才やコントに加えて、**吉本新喜劇**もたっぷり楽しみました。体調を崩したり、怪我をしたりした生徒も３名でましたが、全員元気に帰ってくることができました。生徒諸君、引率の先生方お疲れさまでした。

《ホテルで食事中》

《ハリーポッターの世界》

《ナイトパレード》

《大阪城》

《なんばグランド花月》

２　今日の一言・・・中村修二と松山英樹（愛媛県出身）の言葉です。

○自分がやりたいこと、自分が目指すものがあれば、たとえそれが将来的にあまり光が当たりそうではなくとも、思い切って進むべきだ。
○自分を信じて突き進む勇気さえあれば、成功は現実のものとなる。大きな成功はつい目と鼻の先に転がっているのだ。それを掴むも掴まないも、ひとえに貴方自身の目的への執念と発想の転換にかかっている。

【解説】「**青色発光ダイオード**」の開発で、**ノーベル賞**を受賞した中村修二博士の研究にかけた執念が窺える言葉です。

【中村修二について】電子工学者。工学博士（徳島大学）。２００５年までは日本国籍を持っていたが、その後アメリカ国籍を取得し日系アメリカ人となる。日亜化学工業在籍時に、世界に先駆けて実用に供するレベルの高輝度青色発光ダイオードを発明・開発。赤崎勇・天野浩と２０１４年に**ノーベル物理学賞**を受賞した。成果報酬をめぐっての日亜化学との訴訟でも注目を集めた。２０００年よりカリフォルニア大学サンタバーバラ校教授。世界初となる無極性青紫半導体レーザーを実現し、東京理科大学の窒化物半導体による光触媒デバイスの開発にも貢献した。（「Wikipedia」より）

○僕は誰かにこれがベストの方法だよと言ってもらうよりも、自分で何かを見つけることを、思いのままに捜し求めて違うことを試し、何が自分に最もあっているかを見出すことをいつも楽しんできました
○勝てた試合？『勝てなかった』試合です。『勝てた』じゃないです。勝てなかった、ということが結果として残っただけです。勝てない理由は自分の中でもすごくあるし、それを突き詰めていかないと勝てないな、と思いました

【解説】日本を代表するプロゴルファー・松山英樹選手のゴルフにかける思いの強さがうかがえる言葉です。

【松山英樹について】愛媛県松山市出身。明徳義塾中学校・高等学校・東北福祉大学卒業。レクサス（トヨタ自動車）所属。日本人最年少マスターズ予選通過者（当時１９歳）。アマチュア時代には、日本のアマチュアゴルファーとして初めてマスターズの出場権を獲得した。日本ツアーで史上初ルーキーイヤー賞金王。ルーキー最多タイの年間４勝。史上最速（１６試合）での年間獲得賞金２億円突破。

（参考：「Wikipedia」より）

3　今日の一冊・・・今回の一冊は、**愛媛県出身**の**片山恭一**の『**世界の中心でAIをさけぶ**』です。

世界に新しい宗教が生まれつつある。その名は「シンギュラリティ」。急速に進化する人工知能がやがて人間知を超えたとき、人間存在の意味はどこに見いだせるのか。ビッグデータとアルゴリズム、AIが支配するデジタルテクノロジーの中心地アメリカ西海岸を旅しながら、変わりゆく人々の思考様式、労働と民主主義の価値、国家と企業の未来像を見つめる。ベストセラー作家が深く問う、AI時代の人間の意味論。　（「新潮社」ＨＰより）

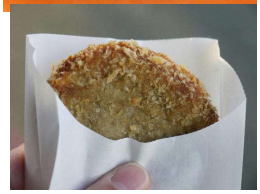
【解説】今世紀初頭に「**セカチュー**」現象なるブームを巻き起こしたベストセラー「**世界の中心で、愛をさけぶ**」の著者・**片山恭一**氏によるほぼ同名の新書です。小説ではなく、**エッセイ風哲学書**といったところか。来たるべき「**シンギュラリティ**」に人間の存在はどうなるのか。人間の存在意義について突き詰めている作品です。シリコンバレーとシアトルというＩＴ産業の二大メッカを旅した著者がタイトルどおり世界（ＡＩ産業）の中心で「ＡＩ」について見聞きし、思考したことをエッセイ風に述べてあります。哲学的な表現も多く散見されますが、何とか読了しました。中でも「**80年代のスーパーコンピューターを優に超える性能の小型コンピューターが我々のポケットのなかに無造作に入っている**」、「**1%の富裕層のために99%の人々はデータを提供し続ける存在と化す**」などの言葉は衝撃でした。

【作者・片山恭一について】　１９５９（昭和３４）年愛媛県生まれ。作家。九州大学農学部卒、同大学院修士課程を経て博士課程中退。８６年、「気配」で文學界新人賞。２００１年刊行の『**世界の中心で、愛をさけぶ**』が三百万部を超えるベストセラーとなる。　（参考：「Wikipedia」より）

4　日本全県味めぐり…第39回は愛媛県です。

香川県のグルメと言えば、「**鯛そうめん**」「**タコ飯**」「**さつま汁**」「**宇和島鯛めし**」を挙げたい。まず「**鯛そうめん**」とは、鯛をまるごと１匹使った料理で、甘辛く煮付けた鯛をそうめんと一緒にいただく南予地域のお祝い料理。波のような形に盛りつけたそうめんに、姿のまま煮た鯛をのせます。喜寿のお祝いや赤ちゃんのお食い初め、披露宴など、家族や親族でのお祝いの席で振る舞われます。中でも宇和島市では、上座に鯛そうめんと『ふくめん』という彩りの鮮やかな大皿を２皿並べて置く風習があります。次に、旬のタコをご飯に炊き込んだ「**タコ飯**」。瀬戸内海産のやわらかいタコをご飯に炊き込んだ郷土料理です。もとは漁師飯で、おいしいタコがとれる地域に伝わっています。今出の沖は、エサが豊富で潮の流れが早いため、色もきれいで身の締まったおいしいタコが獲れることで有名。生きたタコを使う松山のたこ飯は、うまみと風味が抜群。タコの味が良くなる春から夏にかけて食べるのがおすすめです。春先には『木の芽ダコ』と呼ばれる小ダコが出回ります。そして、夏でもサラッと食べられる宇和島の郷土料理「**さつま汁**」。アジやエソなどの魚を焼いてすり下ろし、焼き味噌、鯛の骨でとった出汁、刻みこんにゃくと薬味（みかんの皮、ゴマ、ネギ、刻み海苔）を合わせる。これをご飯の上にかけて食べる。鯛の甘みと味噌のうまみが良く合い、食欲の落ちる夏でも、さらっと食べられます。最後に「**宇和島鯛めし**」。中予・東予で食される鯛めしは、鯛をご飯と共に炊き上げるが、南予では、生の鯛をタレに漬け込み、タレごと熱いご飯にかけて食べます。調理に火は使わず、新鮮な鯛を使うのがポイント。海賊飯とも漁師飯とも言われ、船上の酒盛りの終わりに、酒の残った茶碗にご飯を盛り、醤油をたっぷり含ませた鯛の刺身をのせて食べたのが始まりとされています。南北朝時代から江戸時代にかけて活躍した伊予水軍もよく口にしたと言われています。（参考：「郷土料理ものがたり」）

【坊っちゃん団子】（うつぼ屋）夏目漱石の小説「**坊っちゃん**」に由来する、松山市の銘菓の一つです。松山は和菓子が美味しいと言われており、中でも天然素材にこだわる「**うつぼ屋**」さんが有名です。「坊っちゃん」の作中に「**大変うまいという評判だから、温泉に行った帰りがけに一寸食ってみた**」という文言で登場するお団子です。実際に夏目漱石も噂を耳にして食したそうです。



【じゃこ天】宇和海で獲れる新鮮な小魚（雑魚）を皮付きのまますり身にして、小判型に形成して揚げた練り製品。名前の由来は、『**雑魚天（ざこてん）**』が変化して、『じゃこ天』になったと言われています。さつま揚げや蒲鉾などとは違う感触で、じゃりじゃりとした食感が特徴です。「**大阪夏の陣」で功績をあげた伊達政宗の長男・秀宗**が伊予国宇和島に１０万石の領地を賜り、宇和島藩を築いた際に、故郷である仙台から職人を呼び寄せ、生産させたのがはじまりとのことです。

5　保護者の皆様へ・・・3年生は28日（火）から後期期末試験が始まります。

高校生活最後の定期考査（後期期末試験）が来週２８日（火）から行われます。卒業を目指してご家庭でも激励を。